

赤穂城(加里屋城, 大鷹城) (国の史跡, 百名城) (赤穂市加里屋)

赤穂城（あこうじょう）は、兵庫県赤穂市にある城。国の史跡に指定され、庭園は名勝に指定されている。別名・加里屋城、大鷹城。『忠臣蔵』の舞台の一つとして知られる。

概要

江戸時代、赤穂藩の藩庁が置かれた。元和偃武の後、本格築城された城郭である。縄張りは変形輪郭式。本丸と二の丸が輪郭式に配され、その北側に三の丸が梯郭式に置かれている。銃砲撃戦を意識した設計となっており、十字砲火が可能なように稜堡に良く似た横矢掛かりが数多く用いられている。縄張りは赤穂浅野氏初代長直の時代、浅野氏に仕えた甲州流兵学者の近藤正純によってなされた。長直は築城中、山鹿素行を招聘し、縄張りについて意見を聞いた。これにより二の丸周辺の手直しがされた。それまでは一重の堀に囲まれた搔上城（かきあげじょう）という質素なものであった。

赤穂城は5万石の浅野氏には過度に広壮で、これがために財政難に陥った。5層天守の造営も計画されていたが幕府への遠慮か財政難の為か造営されず、天守台のみが今日に残っている。

市内を流れる千種川から上水道を敷設し、城内のみならず城下各戸にも給水されていた。日本三大上水道の一つに数えられている。

明治時代前期に城内の建物は破却され石垣と堀のみが残っていた。昭和中期から平成にかけて櫓・門・塀・庭園が徐々に再建され、現在も二の丸庭園の再建が進められている。また、1928年（昭和3年）から1981年（昭和56年）の間には、本丸内に西洋洋館風の赤穂高校（旧制赤穂中学）の校舎が建っていた。現在、本丸に建物はないが、往時の建物の間取りを原寸で地面に再現しており、その規模や暮らしぶりの一端を窺うことができる。

歴史・沿革

加里屋城・大鷹城時代

- 1466年（文正元年）-1483年（文明15年）頃、岡光広が加里屋城を築城。この地での最初の築城となる。
- 1600年（慶長5年） 姫路藩主池田輝政の弟・長政が赤穂領主となり赤穂城の前身である大鷹城を赤穂郡加里屋に築城。
- 1613年（慶長18年） 赤穂は輝政の二男で岡山藩主忠継の所領となり、一重の堀・石垣・櫓・門が造営される。
- 1615年（元和元年） 忠継の弟・政綱が3万5千石を与えられ赤穂藩が立藩。御殿が造営される。
- 1631年（寛永8年） 政綱が嗣子なく死去し、弟の輝興が入封。更に櫓・馬屋を造営。
- 1645年（正保2年） 輝興、発狂により改易。城は備前松山藩主水谷勝隆預かりとなる。同年、浅野長直が5万3千石で入封する。

赤穂城時代

- 1646年（正保3年） 近世城郭建設のため、近藤正純が設計図を作成。石材採掘にも取り掛かる。
- 1648年（慶安元年） 6月17日（新暦8月5日）に幕府に築城計画を提出、異例の即日許可となり、築城開始。
- 1652年（承応元年） 山鹿素行を1千石で召し抱える。築城についての意見を聞き、二の丸周辺の造営を変更。
- 1661年（寛文元年） 赤穂城が完成する。
- 1701年（元禄14年） 3代長矩、江戸城中での吉良義央に対する刃傷事件により浅野氏改易となる。城は龍野藩主脇坂安照預かりとなる。
- 1702年（元禄15年） 永井直敬が3万3千石で入封。同年、赤穂浪士討ち入り。

- 1706 年（宝永 3 年） 直敬転封により、森長直が 2 万石で入封。廃藩置県まで森氏が城主となる。

Wikipedia による



国史跡赤穂城跡の指定範囲

